

國學院大學學術情報リポジトリ

人と対話とアンテナと

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 青木, 敬 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001643

人と対話とアンテナと

青木 敬

(本学准教授)

—

まだまだ若いと思っていたが、いつの間にか不惑も過ぎた。わたくしが考古学徒を志してから四半世紀、遺跡の発掘調査と調査研究に明け暮れる日々を送ってきた。

決して短くない年月、印象に残る発掘調査は両手に余るほどだが、足かけ二年におよんだ国宝薬師寺東塔の調査は、とりわけ思い出深い。「凍れる音楽」と称えられ、国宝中の国宝ともいわれる薬師寺東塔、南都西ノ京で一三〇〇年の星霜に耐えてきたその凜然とした姿は、神々しくもある。平成二九年現在、東塔の歴史で初となる全解体修理がおこなわれているが、それにともない塔の土台である基壇とその周囲の発掘調査を実施した。筆者は、その調査を担当するという千載一遇のチャンスをいただいた。

この東塔を何も言わずに支えてきた基壇、記録をとりながら少しずつ掘り進め、やがて創建時の姿が現れた時の感動は、今でも昨日のこのように思い出す。基壇の地下では、掘込地業と呼ばれる大規模な古代の地盤改良を見つけた。その中から当時のまま、地鎮め供養に用いられたと考えられる赤銅色の輝きを放つ和同開珎が出土した時の驚き、そし

てその数分後、一三〇〇年の時間を取り戻すように、急速に酸化し、黒ずんでいく和同開珎を、なす術なく見つめる自分。古代の人々が丁寧に基壇を棒で突き固めた跡が無数に、それもついこの前作業したかのような鮮烈さを放ちながら姿を現した瞬間など、忘れたい体験は数知れず、考古学の醍醐味とはかくなるものと改めて感じ入ったものだ。

ところで、遺跡調査は数多くの人々が関わるプロジェクトでもある。調査を指導して下さる先生、調査を指揮する担当者、アドバイザーをくれる同僚たち、発掘作業に従事する作業員、調査事務に携わる人たちなど、この誰を欠いても調査は成り立たない。調査を支える人たちの意見に耳を傾けながら、そして今や名もわからぬ古代の人々の息吹を感じとりながら、調査を進めていく。発掘調査は、誰の意見にも耳を貸さないで進めると、調査担当者の独善に走ってしまう危険性をはらむ。だからこそ、他人の意見にも耳を傾け、遺跡を正しく評価することがもとめられる。遺跡調査で向き合うべきは遺跡だが、それにもまして忘れてならないのは、遺跡にかかわる「人」なのだ。それは今を生きるわれわれだけの話ではない。

二

人といえば、わたくし自身がこれまで人に恵まれてきた、と胸を張って断言できる。とくに師の存在は大きい。研究者としてのレールを引いて下さったのは、わが師吉田恵二先生であり、目指すべき古墳研究の方向を示して下さいたのは、当時大学院へご出講されておられた白石太一郎先生、学部で講義を受け持たれておられた福尾正彦先生である。この三人の先生のご指導だけでも十分ありがたいが、大学院修了の年に福尾先生が専修大学の土生田純之先生をご紹介くださり、以後変わらぬご指導を賜っている。わたくしが研究者としてステップアップしていく上で、土生田先生のお力添えやアドバイスは本当にありがたかった。幽明境を異にされた吉田先生以外の先生方には、今も折に触れご教示いた

だいている。

ところで、師の教えは金言に溢れている（場合が多い）。しかし、それを鵜呑みにするだけでは前に進めない。古墳の墳丘研究を志して研究の扉を開いた博士課程前期の頃、吉田先生がたくしに、墳丘なんぞ見かけを重視しているのだから、中身のつくりかたに地域性があるとは考えがたいとの仰せ。しかし、悔しかったたくしは、師の意見と異なる論拠を揃えて、恐る恐るだが後日反論を試みた。すると吉田先生は、よっしゃわかつたと、すぐさまわたくしの主張を受け入れて下さった。主張を素直に認めてくださった師の度量の広さに感服し、範とせねばならないなと感じ入ったものである。その一方で、あの時の師の言葉に反論せずに鵜呑みにしていたら、今の自分はなかつただろうなと思うと、ちよっぴり怖くもなる。簡単に揺らぐことのない論拠があれば、たとえ師の教えといえども反論し、意見をぶつけあうことが必要だと思う。いや、むしろ師だからこそ立ち向かうべきではないだろうか。

今やわたくしも当時と立場がまったく逆となってしまった。授業といえども、なかなかうまくはいかない。学生の悩みや相談も十人十色だ。返答に窮する場合もある。そのような時に吉田先生であれば、こうした状況にどう対処したか、自問自答する毎日である。気がつけば、教員として亡き恩師の背中を追い続けている。追いかけることができる師を得たことのありがたさ、最近とくに感じる。

話題を少し変えよう。わたくしは、前職でも大勢の先輩職員と同僚に恵まれた。ひとつの調査成果について報道発表などをおこなう際、大勢の研究者が集まって、一日かけて議論しながら資料を精査する。術語の使い方から記述の方法、適切な図面・写真を掲出しているか、解釈に独善性がないか、徹底的に精査し、議論を重ねる。これは、大いに勉強になった。そして、研究者同士の真剣勝負、成果の公表へ妥協しない姿勢、周りの人からどれだけ教えていただいたことだろう。つくづく、周囲の人たちの援けが今の自分を形成する上で不可欠だと思う。

これは研究者に限った話ではないが、人とのつながり、そして人との対話がとても重要である。なぜならば、対話の

端々に研究のヒントが隠されているためだ。吉田先生は、耳学問を大切にせよ、常々そう仰っておられた。つまり、院生として過ごせる時間は短い、短時間で読める論文の量は限界がある。だからこそ、対話を通じて研究のトリビアを感じすることも史学専攻の大学院生にふさわしい史観を形成するために不可欠だ、おそらく師はそのような含意で仰せになられたのだと、改めて思う。

三

さて、ここで薬師寺東塔に話題を戻そう。ともすると、荘重な建物ばかりに目を奪われがちだが、東塔の構成要素は建物だけではない。例えば、東塔を支える基壇がある。基壇の土は、古代の人々が長い時間をかけて丁寧は何十回、何百回と繰り返し突き固めた所産だが、いざ発掘となった時、その硬さはまさに石のようであった。基壇の土があまりに硬いため、われわれが通常使う発掘道具では歯が立たなかつたほどである。実を言うと、薬師寺は湿地帯のような場所を埋め立てて造営されており、普通に塔を建ててもおそらく傾くか沈んでしまう。そのため、通常では考えられないほど強固な基壇をつくりあげ、一三〇〇年間塔を支えることができた。

では、これほどにも強固な地盤を人工的につくつた理由はなにか。単に軟弱地盤に建てるという地盤的な理由だけなのだろうか。塔の中央を貫く心柱の下には、心柱を受け止める巨大な心礎という礎石が据えられている。さらに、この心礎を支える土饅頭がその下に設けられていた。この土饅頭が、砂利を丁寧に突き固めて強固につくられていたのだ。しかし、塔全体の重量からいえば、心柱と心礎の重さはそれほど重くはない。にもかかわらず、周囲に比べてこの土饅頭は、はるかに強固だった。構造的には必要のない部分にも、一切手を抜くことなく恐ろしいまでに丁寧なつくりだった。もはやこれは理屈で説明できるものではない。これだけ東塔が長い間守り伝えられたのは、幾多の戦乱や天災から

奇跡的にかいくぐってきたという偶然性だけでなく、信仰の世界を後世へ長く伝えたいという人々の強い意志、すなわち必然性もあったと考えたほうがより正確ではなからうか、そう思うようになってきた。換言すれば、わたしは信仰のチカラを薬師寺東塔から教えてもらった。

四

遺跡の発掘調査では、遺跡そのものが言葉を発することはない。しかし、ひとつの遺跡に時間をかけて向き合い続けていくうちに、古代の人々と対話することは決して不可能でない。おかしなことを言うようだが、二〇年以上遺跡調査を続けて、少しだけだが、ようやく土と会話ができるようになった。これが、毎夏の発掘実習で役に立つ。また、膨大な量の土器を観察していくうちに、土器づくりの工人の言葉がわずかだが聞こえてくる。

卑近な例で恐縮だが、自分の研究からその一例を紹介してみたい。奈良の都だった平城京のみならず各地の古代官衙遺跡では、相当量の転用硯が出土する。転用硯とは、本来硯以外の用途でつくられたものを硯として使用した一群をさし、定型化した陶硯をはるかにしのぐ量が用いられていた。この転用硯の一種に甕転用硯がある。これは、甕本来の機能である貯蔵具としての機能を終えたのち、胴部を割った破片を硯に転用した一群である。平城宮・京でも大量の甕転用硯が出土するが、本来は球形の胴体を呈する甕の破片である。これを机に据えて墨を磨ると、硯がぐらついて墨汁がこぼれてしまい、どうにも具合が悪い。なぜこれほど不安定な形状のものをあえて硯としたのか、まったく不可解であった。

とある発掘調査報告書の作成を担当することになり、相当量の甕転用硯を実測することになった。正直、単なる土器片で面白味に欠ける遺物である。それでも、毎日実測を続けていたある日のこと、甕転用硯を実測しようと手にしたと

ころ、その大きさが「手のひらサイズ」であることに気づいた。あれ？と思い、これまで実測した個体の大きさを改めて確かめたところ、どれも一樣に手のひらに収まる大きさではないか。そうか、もしかするとこれは机に据えて墨を磨る道具ではなく、手のひらに乗せて墨を磨る道具、つまり手持ちの硯なのではないかと思いついた。

手持ちということは、座ることのできない環境下、すなわち立ったまま文字を書くといった状況が想定できる。ということ、立ったまま仕事をする状況というと、倉におさめられた物資の管理、あるいは屋外で記録するなど、いくつか想像できる。一言でいうと、現業部門で使う硯が甕転用硯ではないだろうか。デスクワーク用の硯、現業用の硯、使用状況に応じた多彩な硯の形態が存在した、と理解できるだろう。実際に発掘調査で出土した甕転用硯が数多く出土するのは、朝堂院をはじめとする貴族の伺候空間ではなく、その周辺に所在する官衙の一帯である。そこには、現業部門の官衙がいくつも立ち並んでいたはずだ。甕転用硯がたくさん出土する場所の近くには、現業部門の部署があつた可能性が浮上する。硯の形態のちがいと出土位置から、その周辺にかつてあつた施設の具体像が、おぼろげながら浮かび上がってくる。

自ら語ることをない遺物に語らせること、これが考古資料から歴史を考える上で重要な視座となる。と同時に、これが現在の硯という固定観念に束縛されてしまう。つまり硯イコール、机上で使用するという常識から解放されないと、自由な発想が生まれてこない。使い古された言葉だが、常識や定説を疑うこと、ここが肝要だ。そして、ひらめきや気づきによって、それまで灰色一色だった世界が、突如として総天然色となるがごとく変転する。ひとたびこうした経験をする、いよいよ研究の面白さから離れられなくなる。

五

研究のヒントはいつ、どこに、どのようなカタチで転がっているのかわからない。だからこそ、ヒントをヒントだと気づくために、自身がヒントをきちんと受信できるよう、自分のアンテナの感度を上げておくことが必要だと思う。換言すればアンテナとは、突然やってくる研究の「気づき」を逃さぬよう日々欠かしてはならない心構えのことである。もうひとつ付言するならば、往々にして、研究について悩み悩んで悩み抜いたその先に、突如としてヒントを自分のアンテナが受信するものだ。大して時間を費やすことなく易々と進めた研究など、たかが知れている。研究成果が思わしくないからといって、簡単にあきらめてしまうのは実にもったいない。

近年、基礎研究に予算が回らず、日本における研究の地力が低下しているとの懸念が聞こえてくる。こうした懸念を聞くと、まず理系の研究が想起されるが、史学の世界でも同じこと。わたくしは予算以前に、歴史資料を我慢強く読み解くための基本的なトレーニングが、近年疎かになりつつあるのではないかと危惧している。考古学の世界でも同様で、遺物などの実物資料を丹念に観察し、記録する地道な作業が敬遠されがちである。しかし、先述したように来る日も来る日も資料と対話しようと観察を続けていけば、いずれモノと対話できるチャンスが訪れる。そこに近道はない。すぐには成果が出ないかもしれない。でも、こうした基礎があつて、はじめて研究者としてステップアップできる。どれだけモノを観察し、対話できるようになるか、そう、対話は人間だけでなく膨大な歴史資料とも交わすことでもあるのだ。わたくしは、じっくり対象と向き合うことよって過去と対話できることを、遺跡をはじめとする考古資料から教わった。これからも折をみて遺跡に向き合い、教えを請い、これから生きていく自分の道標としていきたい。みなさんも歴史資料や人をかけがえのない財産として、歴史という世界に対して謙虚に向き合ってほしい。そうすれば、その先は

自
ず
と
み
え
て
く
る
だ
ら
う
。